

# 逆接の音韻論と句構造

時 崎 久 夫

## 1. 逆接の構成素間のポーズと音変化の阻止

小論は、but などによる逆接関係と and などの順接との音韻的な違いについて、その統語構造から考察し、その理由を探ろうとするものである<sup>1</sup>。

逆接が順接と異なる音韻的ふるまいを示すことが、これまでの研究で2点指摘されている。まず第1に Cooper and Paccia-Cooper (1980:163) は、(1b) の yet のような否定的接続詞の方が (1a) の and のような肯定的接続詞よりもその前にポーズが起こりやすいと述べている。

- (1) a. The tall and frail student flunked chemistry.
- b. The tall yet frail student flunked chemistry.

また (2b) に示すように、否定的な接続詞が削除されてもポーズが伴うようだと述べる。

- (2) a. The speedy reckless driver rode into town. (speedy and reckless)
- b. The speedy careful driver rode into town. (speedy yet careful)

---

<sup>1</sup> 本稿は日本言語学会第127回大会(2003年11月22日(土)、23日(日)、大阪市立大学)での発表原稿に加筆修正を施したものである。参加者の方々からは貴重なご意見をいただいた。遠藤史、風間伸次郎、田端敏幸、津曲敏郎の各氏、その他の方々にお礼申し上げます。

第2に Nespov and Vogel (1986) は、2文間で前の文の最後の子音が順接の場合のみ変化しうるとする。

- (3) a. It's late. I'm leaving. → ... la[r] I'm ...  
 b. It's late. I'm not leaving though. → \*... la[r] I'm ...

(3a) では最初の文に次の文が therefore のような順接の意味で続いており、弾音 (Flapping) が起こりうる。しかし but の意味の逆接となる (3b) ではこの変化が生じない。同様につなぎの r (Linking r) も順接の (4a) では生じるが、逆接の (4b) では生じないと述べられている。

- (4) a. I'm shorter. I'll go in the back. → ... shorte[r] I'll ...  
 b. I didn't invite Peter. I should have though. → \*... Pete[r] I ...

ここで r は発音されない綴り字上での r を示し、順接の場合のみ発音されるようになる。

順接と逆接の例をもう少し見てみよう。Nespov and Vogel (1986) は (3a) を therefore の意味で接続されているとし、他に and と because の意味の例としてそれぞれ (5a)、(5b) などをあげている。

- (5) a. You invite Charlotte. I'll invite Joan. → ... Charlo[r] I'll ...  
 b. Hide the vodka. Alvin's coming. → ... vodka[r] Alvin's ...

(5a) は弾音、(5b) は嵌入の r (Intrusive r) の例であり、どちらも順接であるため音変化が生じる。これに対して or の意味の逆接では、次の (6a)、(6b) にそれぞれ示すように弾音も嵌入の r も生じないと述べられている。

- (6) a. Stop that. I'll leave otherwise. → \*... tha[r] I'll ...

b. Finish your pasta. I'll eat it otherwise. → \*... pasta[r] I'll ...

ではなぜ逆接では、順接と異なり、ポーズや音変化の阻止が起こるのだろうか。Nespor and Vogel(1986:244)は、(7)に示すように、therefore や because のような肯定的意味関係の時のみ、文1つずつを単位とする2つの隣接する韻律単位 Utterance が1つに再構造化されうると規定し、1つの Utterance の中でのみ音変化が起こるとする。

(7) *U restructuring*

Adjacent *Us* may be joined into a single *U* when the basic pragmatic and phonological conditions are met and when there exists a syntactic relation (ellipsis, anaphora) and/or a positive semantic relation (*and, therefore, because*) between the *Us* in question.

そして Posner (1973) の「否定の場合のポーズは、話者が前の語の情報からかけ離れた語彙情報にアクセスするのに時間がかかることの反映」という示唆を、肯定と否定の違いの根拠として示している。

しかし、再構造化が起こるのは肯定的接続の時のみと単に条件を付けるだけでは、根本的な説明とならない。また語彙情報の処理時間という考えも、具体的な裏付けが無く、推測の域を出ない。実際 (1a) と (1b) では、接続される2つの形容詞はどちらも同じであり、処理時間も同じと予測されてしまう。さらに Nespor and Vogel (1986) は *U restructuring* は (7) に示した肯定・否定の意味関係だけでなく、スタイルや発話の速度という付加的な要因にもよると述べているが、それは (7) の定式化には反映されておらず、十分な説明とは言えない。

そこで以下では、句構造とその音韻的解釈による説明を示し、なぜ逆接が順接と異なるのか、また発話の速度さらには文の長さが関係するのかを述べる。

## 2. 明示的な従位接続詞と統語・音韻境界

まず統語的な境界 ([または]) は、音韻部門で音韻的な境界 (/) として解釈されると仮定する (cf. Tokizaki 1999)。

(8) Interpret boundaries of syntactic constituents [ ... ] as prosodic boundaries /.../.

順接の (3a)、逆接の (3b) の統語構造はそれぞれ (9a)、(9b) となる。ここでは2つの明示的な語句を結びつける統語範疇と境界のみを示す。それ以外の機能範疇 (functional category) およびその投射 (projection) は音韻解釈に不可視的 (invisible) であると仮定する。また Larson (1990) に従い、文と文は非明示的な接続詞 and (&) の指定辞と補部となっていると考える<sup>2</sup>。

- (9) a. [<sub>&P</sub> [<sub>IP</sub> It's late] [<sub>IP</sub> I'm leaving]]  
 b. [<sub>&P</sub> [<sub>IP</sub> It's late] [<sub>CONJP</sub> [<sub>IP</sub> I'm [<sub>NEGP</sub> not leaving]]] though]]

逆接の (9b) では従位接続詞 though のために ConjP の統語境界が音韻解釈に可視的となる。(9a)、(9b) は(8)によって、それぞれ (10a)、(10b) の音韻表示と解釈される。

- (10) a. // It's late // I'm leaving // → ... la[ɾ] I'm ...  
 b. // It's late /// I'm / not leaving // though // → \*... la[ɾ] I'm ...

<sup>2</sup> (9a)、(9b) の詳細な構造はそれぞれ (ia)、(ib) である。

(i) a. [<sub>&P</sub> [<sub>IP</sub> It's late] [<sub>&</sub> & [<sub>IP</sub> I'm leaving]]]  
 b. [<sub>&P</sub> [<sub>IP</sub> It's late] [<sub>&</sub> & [<sub>CONJP</sub> [<sub>IP</sub> I'm [<sub>NEGP</sub> not leaving]]] though]]]

よって逆接の (10b) の方が、順接の (10a) よりも、late と I'm の間に1つ音韻境界が多いことになる。そしてこの差が (10b) で Flapping を不可能にしていると考えられる。逆接の (9b) では文末に though が必要なため、文と文の間の統語境界が3つとなるが、順接の (9a) では不必要なため2つのみである。このようにして2文間の音韻変化に関する順接と逆接の違いが説明できる。同様に (4b) も though を含んでおり、(6a)、(6b) は otherwise を含んでいるため、1本多い音韻境界が音変化を阻止していると説明できる。

ここでの要点は、but や or の意味の逆接では though や otherwise といった明示的な従位接続詞が必要となることである。Nespor and Vogel (1986) も、but や or の意味の逆接が (非明示的に) 含意 (imply) されている場合は極めて見つけにくく、その場合も複雑な音調パターンを伴うと述べている<sup>3</sup>。

### 3. 非明示的な従位接続詞

前節では、明示的な従位接続詞のため逆接で音変化が阻止されることを述べた。しかし (1)、(2) のポーズに関する違いは、(3) などとは異なり、単語の数も同じであるため、同じ説明だけでは不十分である。以下では、明示的な従位接続詞を持たない逆接でも、非明示的な従位接続詞が存在し、それが句構造と音韻解釈に反映されることを述べる。

Larson (1990: 596) は (11) の例を挙げ、「R 表現を含む S は同一指示句を含む S によって c 統御されてはならない」という制約 (12) を示している。

(11) \*<sub>[&P</sub> [<sub>S1</sub> He<sub>i</sub> came in] [<sub>&</sub> and [<sub>S2</sub> John<sub>i</sub> was tired.]]]

(12) ... an S containing an R-expression cannot be c-commanded by an S containing a coreferential phrase.

<sup>3</sup> 音調パターンによって明示的な従位接続詞なしに逆接となる場合は、後述するような非明示的な従位接続詞が存在すると考える。それが特徴的な音調として解釈されるのである。

(11)ではS2がS1にc統御されているため、同一指示解釈が正しく排除されるとする。(11)はandによる順接の等位構造であったが、逆接のbutの場合はどうであろうか。まずbutもandと同じ等位構造を作ると仮定して、次の文を考えてみよう。

(13) [<sub>&P</sub> [<sub>S1</sub> He<sub>i</sub> hasn't contacted me], [<sub>&</sub> but [<sub>S2</sub> I'm sure John<sub>i</sub> is back.]]]

(12)を(13)に当てはめると、(11)と同様にS2がS1にc統御され、同一指示解釈不可と誤った予測をしてしまう。これに対し、(13)と意味的にほぼ同義で、明示的な従位接続詞を持つ(14)では、S1は従位接続詞althoughと接続詞句ConjP(もしくはPP)を作るためS2をc統御しない。

(14) [<sub>&P</sub> [<sub>CONJP</sub> Although [<sub>S1</sub> he<sub>i</sub> hasn't contacted me]], [<sub>&</sub> (yet) [<sub>S2</sub> I'm sure John<sub>i</sub> is back.]]]

よって(12)により、同一指示が可能と正しく予測される。そこで意味から考えて、(13)は音形を持たない従位接続詞THOUGHがS1を補部としてとっていると仮定し、その構造を(15)と考える。

(15) [<sub>&P</sub> [<sub>CONJP</sub> THOUGH [<sub>S1</sub> He<sub>i</sub> hasn't contacted me]], [<sub>&</sub> but [<sub>S2</sub> I'm sure John<sub>i</sub> is back.]]]

すなわちS1は譲歩あるいは前置きを表している節と考えるのである。(15)ではS2がS1にc統御されず、(12)によって同一指示が可能と正しく予測される。

この音形を持たない従位接続詞THOUGHは、意味及び同一指示の事実に加えて、音調の点からも裏付けられると思われる。前節で、butやorの意味の逆接が(非明示的に)含意されている場合は複雑な音調パターンを伴うというこ

とを述べた。例えば (3b) のような例で though が明示的に現れない (16a) のような場合を考えてみよう。

- (16) a. It's late. I'm not leaving.  
b. It's late. I'm not leaving THOUGH.

もし (16a) の 2 文が逆接関係なのであれば、それを表す特徴的な音調は (16b) の非明示的な THOUGH を音韻的に解釈したものと考えられるだろう。

ここでの考えは、一般に等位構造と言われている but で結ばれる逆接関係では、第 1 の被接続要素は、意味的にも統語的にも従属的だということである。この考えに立って (1b) の例をもう一度考えてみよう。(13) は節と節の接続であったが、(1b) は形容詞と形容詞の接続である。しかし、やはり第 1 の形容詞は意味的に従属的になっているので、(15) と同様に従位接続詞 THOUGH が第 1 の形容詞の前に存在し、統語的にも従属的になっていると考えられる。

- (17) The [<sub>&P</sub> [<sub>CONJP</sub> THOUGH tall] [<sub>&</sub> yet frail]] student flunked chemistry.

これが正しいとすると、逆接の (1b) の構造 (17) は順接の (1a) の構造 (18) と異なる。

- (18) The [<sub>&P</sub> tall [<sub>&</sub> and frail]] student flunked chemistry.

(17) の「背が高い (けれども)、しかしひ弱な」と (18) の「背が高くてひ弱な」の違いである。(8) の解釈規則を (17)、(18) それぞれに適用すると音韻表示は (19a)、(19b) となる。

- (19) a. The // THOUGH tall // yet frail // student flunked chemistry.  
 b. The / tall / and frail // student flunked chemistry.

逆接の (19a) では yet の前の境界は 2 つ、順接の (19b) では and の前の境界は 1 つである。語と語の間の音韻境界の数がポーズに反映されると仮定すると、逆接の (19a) の方が、順接の (19b) よりも接続詞の前にポーズが置かれやすいということが自然に説明できる。また接続詞が削除されている (2a)、(2b) も同様に説明できるだろう。

#### 4. 音韻境界によるポーズ及び音変化の阻止

最後に、音韻境界がどのようにしてポーズを生じ、音変化を阻止するのかを述べる。まずポーズについて考えよう。音韻境界 (/) は、音韻部門でさらに Selkirk (1984) の言う、silent demibeat (x) に変換されると仮定してみる。すると (19a)、(19b) はそれぞれ (20a)、(20b) となる。

- (20) a. The xx THOUGH tall xx yet frail xx student flunked chemistry.  
 b. The x tall x and frail xx student flunked chemistry.

silent demibeat は無音のリズムを表すもので、tall の後では逆接の (20a) で 2 つ、順接の (20b) で 1 つ存在する。よってその場所のポーズの長さは (20a) が (20b) の 2 倍となることを予測する。そしてこれは Cooper and Paccia-Cooper (1980) の、(1b) のほうが (1a) よりポーズを生じやすいという観察に合うものと考え<sup>4</sup>。

<sup>4</sup> silent demibeat の数は、tall の前も (20a) で 2 つ、(20b) で 1 つと異なっている。しかし実際にその場所にポーズが (20a) で生じるとは考えられない。これは the が後接語的 (proclitic) であり、silent demibeat を無視して tall に接語化するためと考えられる。しかし frail の後にも (20a)、(20b) とともに 2 つ silent demibeat があるが、ポーズは生じない。2 つの silent demibeat の連続がすぐにポーズになるのではない。silent demibeat に



次に音変化の阻止について考える。もう1度(10)の例を示す。

- (10) a. // It's late // I'm leaving // → ... la[r] I'm ...  
b. // It's late /// I'm / not leaving // though //  
→ \*... la[r] I'm ...

もし音韻境界(/)が1本でも間にあれば音変化を阻止することとなら、(10 a)においても弾音化は生じないことになってしまう。そこで次の境界削除規則を仮定する (cf. Tokizaki 1999)。

- (21) Delete  $n$  boundaries between words. ( $n$ : a natural number)

これは「語と語の間の  $n$  (自然数) 個の境界を削除せよ」というもので、変数  $n$  は、韻律範疇 (prosodic category) の大きさ及び発話の速度によって増加するものと考えられる。(21)を  $n=2$  として(10a)、(10b)に適用すると、(22a)、(22b)がそれぞれ得られる。

- (22) a. It's late I'm leaving  
b. It's late / I'm not leaving though

(22b)では late の後に境界が残り、これによって Flapping が阻止される。また発話の速度を下げて  $n=1$  として (10a) に適用すれば、(23) のように順接でも Flapping が阻止される。

- (23) / It's late / I'm leaving /

---

加えて、逆接に伴う上昇音調が関与している場合にポーズが起こるとも考えられるが、いずれにせよ、この点については再考しなければならない。

この分析の利点は、文の長さという要因も扱うことができることである。Nespor and Vogel (1986: 240) は、U restructuring の音韻的条件の1つとして、(24) に示すように、2つの文は比較的短くなくてはならないとしている。

(24) The two sentences must be relatively short.

実際これまで音変化が起こるとしてあげた例は2文とも短いものであった。これはなぜだろうか。ここでの分析によれば、長い文になれば、それだけ構成素構造が複雑になり、結果として2文間により多くの統語境界が生じるためであると言える。例えば (10a) を長くした例を考えてみよう。

(25) a. [It's [already late]]. [[Irene [and I]] [are leaving]].  
 b. / It's / already late //// Irene / and I /// are leaving //

(25a) では already と Irene and のために2文間の境界が (10a) に比べて2つ増えている。この4つの境界は音韻境界として (25b) のように解釈され、削除規則 (21) をより速い速度の  $n=3$  で適用しても (26) のように2文間に境界が残る。

(26) It's already late / Irene and I are leaving

このように、ここでの分析は発話の速度と文の長さという要因も自然に扱うことができる。

## 5. まとめ

以上、逆接と順接が音韻的に異なるのは、句構造すなわち統語境界の違いに基づく音韻境界の違いのためであると論じた。逆接には明示的または非明示的

な従位接続詞が存在し、それが音韻の違いを生んでいると言える。この結果は、接続や談話の構造に新しい観点を与えるものと考えられる。

## 参考文献

- Cooper, William E. and Jeanne Paccia-Cooper. 1980. *Syntax and Speech*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Larson, Richard K. 1990. Double objects revisited: Reply to Jackendoff, *Linguistic Inquiry* 21, 589-632.
- Nespor, Marina and Irene Vogel. 1986. *Prosodic Phonology*. Dordrecht: Foris.
- Posner, Michael I. 1973. *Cognition: An Introduction*. Glenview, Ill.: Scott, Foresman.
- Selkirk, Elisabeth O. 1984. *Phonology and Syntax: The Relation between Sound and Structure*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Tokizaki, Hisao. 1999. Prosodic phrasing and bare phrase structure, *Proceedings of the North East Linguistic Society* 29, vol. 1, 381-395.